The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	旅館で本を読む哲学者 ： 水俣への哲学的アプローチの方法をめぐって
Author(s)	吉川, 孝
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2022, 4, p. 97-116
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86366
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集３　「〈応用〉することの倫理――緊縛シンポ、ブルーフィルム、ジェンダー」

旅館で本を読む哲学者
――水俣への哲学的アプローチの方法をめぐって――

吉川　孝

哲学の研究者は、概念を定義したり、論争を整理したり、古典的文献を現代の議論の文脈において解釈したりする。さらに、こうした文献を読む手法を通じて、現実の社会問題や道徳的問題にもコミットできる。議論となっている事柄について、混乱した言葉の意味を明確にしたり、対立する立場を整理したりすることは、応用的研究においても歓迎される。たいていの分野には議論の対立や先行研究の積み重ねがあって、それらを追いかけることから研究が始まることになる。では、研究の蓄積がそれほどないトピックの場合には、どうなるだろうか。さらには、それが何らかの人にかかわる場合には、そうした人たちのことをどのように知り、どのような関係を築くべきだろうか。一般的に、人にかかわる学術研究には倫理的配慮が求められており、そうした研究倫理が制度化されることもある。しかし、文献研究を基盤とする哲学においては、人について語るときにも人からデータをとることは求められず、人にかかわることの倫理についてほとんど考えられてこなかった。

水俣病をめぐる問題に哲学がかかわったのは 1970 年代であるが、まさにこれこそは、先行研究の蓄積がないままに、水俣病患者という当事者とのかかわりが求められるトピックであった。本稿は、1970 年代後半から 80 年代前半にかけて、不知火海総合学術調査団の一員として水俣を訪れ、関連する論文を発表した哲学者・市井三郎を手がかりに、人にかかわる哲学研究の方法について考察する[1]。市井の論文は、調査団メンバーの最首悟によって厳しく批判されており、この「市井-最首論争」が報告書『水俣の啓示』（1983 年）に収められた。この論争については、調査団のメンバーである鶴見和子や色川大吉からコメントがなされ、さらには、丸山徳次、川本隆史、鬼頭秀一などの哲学・倫理学に関わる研究者によって取り上げられたが、日本における応用倫理学や応用哲学などの展開において正面から顧みられたとは言い難い。

本稿では、これまでの論者の指摘を踏まえたうえで、哲学の応用的手法における「概念」の使い方や「見方」にかかわる問題について考察する。市井が水俣を論じたのは、アメリカ

[1] 本稿は、「遠く離れて思考することの倫理」（日本倫理学会第 72 回大会・公募ワークショップ「〈応用〉することの倫理：緊縛シンポ・ブルーフィルム・ジェンダー」2021 年 10 月 1 日での提題）を新たに原稿にしたものである。『フィルカル』6(3)号（ミュー、2021 年）に掲載された拙論「水俣の哲学者」（吉川 2021b）は、本稿のダイジェスト版であり、内容的に重なる部分がある。この事情については、文末の付記に記す。

から応用倫理学が「輸入」される以前の時期であり、環境、企業、技術などについて倫理学的研究の蓄積はなかったし、臨床哲学や応用哲学などの日本独自の試みもまだなされてはいなかった。この時期の市井による水俣へのアプローチから哲学の研究手法を検討することは、応用的研究の役割や限界を考えるうえで有意義である。

1　人びとの目の網にかかる学術調査

不知火海総合学術調査団は、作家の石牟礼道子の呼びかけによって、色川大吉を中心に、鶴見和子と市井三郎の主催していた「近代化論再検討研究会」をベースに 1976 年に結成された。当時は、第一次訴訟の判決（1971 年）によりチッソの加害責任が認められて、水俣病の認定と補償金が結びついた制度が確立されていた。患者への補償の道筋が開かれたことは歓迎すべきだが、認定の申請者が増加するなかで、財源の問題なども意識されるようになり、患者を見る目が変わってきていた。県議会公害対策特別委員会から補償金目当てのニセ患者がいるという発言もなされ、これに抗議した未認定の患者 2 名が市民の目の前で逮捕された。患者側への風当たりが強くなってきたとき、石牟礼は、著名な鶴見和子、東京大学に所属する石田雄・菊地昌典などが関係する権威ある研究会を招くことで、「水俣市民の感情を変えることができるかもしれない」と考えたようである（色川 2020: 311）。そもそも水俣では、以前から、企業の利益になる学説が流布されたり、研究目的の実験と受けとめられかねない診察がなされたり、専門家によって設定された基準によって多くの患者の認定が困難になるなど、さまざまな学術研究による被害が生じていた。石牟礼には、学問への素朴な信頼があるわけではなく、患者たちに不利益をもたらすような制度や政策の後ろ盾になっている権威に対して別の権威で対抗することが重要であった[2]。

さらには、研究者たちが水俣に来ることで、研究そのものが問い直されることが目論まれてもいた。

> せめてここ百年間をさかのぼり、生きていた地域の姿をまるまるそっくり……生物学、社会学、民俗学、海洋形態学、地誌学、歴史学、政治経済学、文化人類学等、あらゆる学問の網の目にかけておかねばならないのではないか。網の目にかけるということは、逆にまた、現地の人びとの目の網に、学術調査なるものがかかるということでもあります（石牟礼 2004: 174-175）。

[2] 「私は初めから、この人〔石牟礼〕は相当なステラテジスト（戦略家）だと思いました。しかもそれは権威を持って権威を打倒すると言う発想でした」（色川 2020: 311）。

> まだ暖かみの残っている歴史の心音に掌をあてて、時間をゆっくりかけて巻きもどしてゆけば、ほろり、ほろりと、あのひとたちが出て来ます。丁寧に、丁寧にあつかわねば、あのひとたちが苦しがるから（ibid.: 186）。

石牟礼の重い言葉のとおり、不知火海総合学術調査団のメンバーは、1976 年 3 月の水俣の最初の訪問からすぐ後に、研究の方向性や意義、現地の人々との関係などをめぐって喧々諤々の議論を繰り返すことになる。参加者たちは、ときに自らの専門分野と水俣とのつながりを見いだしにくく研究テーマを絞ることができなかったり、現地の患者や支援者との人間関係の築き方に迷ったり、専門家による学術研究の意義や役割が正面から問われることになった[3]。調査団に同行した羽賀しげ子の「調査団日誌」には、メンバーの宇野重昭の以下のような言葉が記されている。

> 水俣の運動がこれほど分裂しているとは思わなかった。ここにはどうにも展望がなく、とてもやりきれない。自分が今まで勉強してきたことや方法論で水俣にアプローチして、何か、患者とか、ここで闘っている人たちのために明るい展望を見られるような形でやれるかどうか、どうしてもまだつかめない（羽賀 1983: 422）。

中立性を掲げようとする研究者が、企業や行政のことをも視野に入れながら、抑圧されている患者やその支援者たちによる社会運動――そこにも分裂が生じている――とそもそもどのようにかかわるのかは、学術研究における原理的な問題を含んでいた[4]。5 年にわたる現地調査からさらに 2 年を経て刊行された報告書『水俣の啓示』（1983 年）にも記載されている右往左往のさまは、水俣という人類史上未曾有の問題に直面した学術研究者たちの格闘の記録でもある（色川 1983a: 5-38, 1983b: 471-503, 羽賀 1983）[5]。

市井三郎は、報告書に「哲学的省察・公害と文明の逆説　水俣の経験に照らして」（市井 1983）を寄稿しているが、この論文は、最首悟の批判論文「市井論文への反論」（最首 1983）とともに掲載され、報告書を舞台にして論争が繰り広げられるという異様な展開を見せている[6]。最首は、市井が「人間淘汰」という概念を使って水俣を考察した点、水俣病患者の

---

[3] とりわけ、支援者の若者による学問に対する不信の露骨な表明は、調査団に波紋を生じさせている（羽賀 1983: 431-452, 色川 2020: 321-322, 327-328）。

[4]「調査団日誌」は以下のように内部の対立を伝えている。「宇野、菊地対色川、小島麗逸の意見が対立する。支援グループとどう付き合ってゆくか、患者さんたちとどうつきあってゆくか。「こんな筈じゃなかった」という声にたいして、小島さんが「もう私たちは深入りしたんですよ」と答え、宇野さん、菊地さんは、「学問を尊重するためあくまでも客観的立場を堅持したい」(羽賀 1983: 440−441)。

[5] 不知火海総合学術調査団については、森下と小松原を参考にした（森下 2010, 小松原 2018）。

[6] 鶴見和子によれば、報告書は「大変不思議な本の読み方」「非常に不幸だと考える読み方」がされており、「最後の論文（最首さんの論文）だけ読んで、この本がどういう本で

描像が狭隘である点を批判し、「市井論文の趣旨は撤回されるべきである」と主張した（最首 1983: 426）。以下では、市井と最首の論文の内容を確認したうえで、概念の使い方と人の見方への厳しい批判が哲学研究に向けられた意味を明らかにしたい。

２　市井–最首論争：概念と見方をめぐって

市井三郎（1922-1989）は、ホワイトヘッド、ラッセル、ポパーなどの翻訳でも知られている。大森荘蔵（1921-1997）と同世代の分析哲学者であり[7]、その関心は、論理、科学、言語、心などの分析哲学の枢要なトピックにとどまることなく、あるいはそれ以上に、歴史、価値、社会変革、日本の近代化、民衆思想などにも及び、思想の科学研究会のメンバーとして現実の社会問題にも積極的にコミットした（こうした多方面の活動が分析哲学者としての評価には結びつかなかったようである）。そうした研究スタイルにおいて、日本の地域性や現実の社会問題を意識した哲学研究を推進して、学際研究の中心となっていたことは、今日においてこそ評価されるべきであろう[8]。市井が哲学者でありながらも、水俣の調査団に参加することは、ある意味では自然だったようにも思われる。

市井は、調査団の水俣訪問以前にも、『歴史の進歩とは何か』（1971 年）において、「不条理な苦痛の削減」を掲げるある種の功利主義の価値論の立場から、ダーウィニズムを踏まえ、人間の個体や集団の淘汰という観点から歴史の進歩の意味について考察していた。そこでは、「なぜこの自分は、同じ日本人に生まれていながら、よりによって水俣病のギセイ者として苦しまねばならぬのか」と、公害に苦しむ人に移入した立場から実存の問いが語られる（市井 1971a: 206）。また、近代化論再検討研究会の成果をまとめた『思想の冒険』（1974 年）の論文でも、「完全な廃人（あるいは植物人間）と化したその公害病のギセイ者本人」が苦痛を感じなくなるとき「不条理な苦痛が減ったといえるだろうか」と、もはや苦痛を感じないほど重度の患者について検討される（市井 1974: 52）[9]。

報告書『水俣の啓示』（1983 年）の論文において、市井は「人間淘汰」という自らの概念を手がかりに水俣について考察する。「人間淘汰」とは、人間が、飢餓、疫病、自然異変、戦争、虐殺などの「自然死に至るサイクル以外の理由で、滅んでゆくこと」である（市井

あるか」が判断されている（色川 1983b: 499）。新編（色川 1995）には、両者の論文や調査団日誌は掲載されていない。

[7] 市井は、大森の『言語・知覚・世界』のレビュー（市井 1971b）を執筆しているほか、自身が編んだ『科学の哲学』（市井 1968）に、大森の論文「知覚と認識」を入れている。

[8] 市井が中心メンバーとなって、いくつかの学祭的な研究会が開催され、思想の科学研究会編『明治維新　共同研究』（徳間書店、1967 年）や市井三郎・鶴見和子編『思想の冒険』（筑摩書房、1974 年）などの研究成果も発行されている。こうした市井の哲学は「サークル哲学」（久野 1991）と評されることもある。

[9] 報告書に先立つ水俣への言及についても、報告書と同じ問題が見いだされることが指摘されている（丸山 1995; 川本 2006）。

1983: 392）。しかも、通常の「淘汰」は優れたものの選別を意味するが、「人間淘汰」にはこの種の価値判断は含まれない（ibid.: 392）。市井は、人間淘汰という概念を価値中立的に定義して、公害病の死者をその一例として挙げて、そうした淘汰が容認されるかどうかを考察する。さらに市井は、水俣病による死者のみならず、「水俣病患者として生きていること自体が地獄図なのである」とも記して、重度の胎児性患者が生きていることを新たな人間淘汰と見なしている。

> 単なる死滅、滅亡、無存在化、をはるかにこえて、このような異状人間がつくられ、生命の一仄はなお執拗に自己主張をしつづけている、という事実こそが、人間淘汰の新たなる深淵をわれわれに訴える（ibid.: 403）。

公害による淘汰が「必要悪」として許容されるかどうかは「水俣のギセイ者たち」にかかわる問題である（ibid.: 408）。現代の社会生物学は、公害や戦争による人口の安定化を道徳的に批判するわけではなく、「水俣病患者といったギセイが出ても、仕方がなかったというに等しい」（ibid.: 410）。市井は、ここに見いだされる優生学的な立場に大きな危惧をいだきながら、水俣病による淘汰などの事例について、「なんら理性的に首肯される理由がない」し、そのような淘汰を許容する「学説」も許すべきではないと、論文を結んでいる（ibid.: 410）。

これに対して最首は、市井論文の「苦しむ者への無残なふみにじり方」に対する「驚きと怒り」を表明し、論文が「無意味」であるばかりか「加害的」であると主張する（最首 1983: 415）。市井は「人間淘汰」の概念を没価値的に用いるというが、ダーウィンの「自然選択（natural selection）」の「selection」に「砂金採掘の際の金を選り分ける」という意味の「淘汰」という訳語があてられたように、この日本語には「価値あるものを選ぶ」という意味があり、価値を捨象することに無理がある。市井は「人一倍、言葉の定義やら、歴史性について詮議すると思われている「哲学」」を専攻するにもかかわらず、そこから「逸脱」して「全く理解を絶する」ことをしている（ibid.: 419）。「価値をぬこうとしてぬけない淘汰概念をつかって、公害を新たなる人間淘汰と規定することは、被害者の苦しみ、人間性をふみにじり、公害発生者、公害発生機構を免責、容認する」ことになりかねない（ibid.: 422)。

最首は、次いで、水俣病についての認識（＝病像）に注目する。市井の「見かた」は「死者のみならず、生者も淘汰されつつある人々ととらえ」、医学的に有効な治療法がなく重い後遺症がつづくことを強調している（ibid.: 424）。重症患者にのみ依拠して、患者を「淘汰」されつつある存在と見なすことは、水俣病の認定基準を厳しくする流れに棹差すものであり、補償を妨げたり、差別を助長したりしかねない[10]。しかも「「不治の病」イコール絶

[10] 病像をめぐる認識の偏りは、今日の福祉制度にまで影響を及ぼすことになり、いまなお解決されない問題を残している(永野 2020)。学術調査報告に掲載された市井の哲学論文

望のおしつけは、臨床的実体偏重の「病気観」と優生学的「人間観」の相乗によって生まれる」というように、市井による重度の患者の記述には、彼自身が批判しようとした優生学的発想が混入している（ibid.: 425）。

> 価値禁欲的な人間淘汰という詭弁を弄して公害を疫病や自然災害と同列に扱い、よって公害被害者の苦しみをアイマイ化させ、公害による人口の安定化という自分の立てた愚にもつかぬ命題を自分で否定する、市井論文の趣旨は撤回されるべきである（ibid.: 426）。

最首は、このように、市井の考察の結論ではなく、概念の使い方、問題設定の仕方、さらには水俣病患者をめぐる認識・見方（病像）を問いただした。

３　研究者と当事者：調査団の観点から

調査団メンバーやその後の研究者の見解を手がかりに、市井論文の問題点を検討してみたい。それは最首の言うように、加害的であり撤回されるべきものなのだろうか。つまり、それは、論じる価値のないことを論じていたり、学術論文として許容できない欠陥があったりするという意味において問題なのだろうか。あるいは、何らかの問題があるにしても学術論文としての価値をもち、今後も議論の材料となりうるものなのだろうか。調査団のメンバーでは、団長の色川や市井と親しかった鶴見が重要なコメントを残している。

団長の色川の見解については、いくつかの手がかりから確認できる。

> 調査団討議での席上の、色川氏の市井氏に対するあなたは転向したという発言は忘れがたいが、それは「歴史の進歩とはなにか」の主張からあまりにもかけはなれているという指摘であった（最首 1983: 425）。

この最首論文の記載によれば、色川は以前の著作からの市井の「転向」を見いだしたようである[11]。公害の被害者の苦痛の削減を掲げていた『歴史の進歩とはなにか』の立場が、ここ

が、こうしたことの直接的な原因になっているとは考えにくいし、そうした因果関係を証明することは困難であろう。しかし、当時から、水俣病についての特定の「認識」が、専門家やそれ以外の人たちによって表明され、差別的な言動を動機づけたり、多様な患者の実情を踏まえない政策を導いてきたりした。後述の鬼頭秀一やマードックはこうした認識の水準に光を当てており、ここから応用倫理学を構想する可能性が開かれている。

[11] 最首論文は、複数のメンバーの見解を代表するという立場から書かれており、多くの団員が市井論文に問題を見いだしていた。

では重症患者の生の悲惨さを強調するだけになり、ある種の転向と受け取られている。また色川は、報告書のほとんどの論文は「極力住民の中に溶けこみ、そこから内なる声を聞きだそう」という「民衆史的な方法」を基本としていたが、「例外」があったと指摘しており、市井論文の異質性をほのめかしている（色川 1983a: 38）。さらに後年、鶴見和子の追悼の論集では、市井が社会生物学から着想を得た「人間淘汰」説を水俣へ適用しながら、それに対する批判が不徹底だったことについて、「最首さんの指摘の通り、おのれの「無意識的領域」にあった差別観の表出であった」と指摘されている。しかも「そのことは、今になってはっきりと分る。私自身の「不明」でもあったのだから」とも述べて、市井に潜んでいた優生思想をいちはやく抉り出した最首の指摘を評価している（色川 1999: 135）。

しかしながら、晩年のインタビューでは、次のようにも語っている。

> あれは最首さんが食い下がったのです。あの事情はね、私には今でもよく分からないんですよ、どうして最首さんがあんなに頑張ったのか。要するに、市井さんの論考は、人生経験からきたものではなくて、ペーパー・ワークの屁理屈だと言うわけですよ。市井さんは市井さんで、ちゃんとカント流の論理を組み立てて書いてはいました。ところが、一般にはなかなか通らないですよね、カントがどうとか、かんとか言ったって。それを最首さんは屁理屈だと突っぱねた。要するに本質が何なのか分からないではないか、というのが最首さんの意見（色川 2020: 331）。

ここでは、市井論文の内容や手法を擁護しているわけではないが、最首による批判の激しさや執拗さへの否定的な態度がはっきり表明されている。その上で、市井論文がカントなどの哲学者を手がかりとする抽象度の高い論文として学術的に許容されうる可能性が示唆されている[12]。ここからは、色川自身が、最首の指摘の正しさを認めながらも、市井論文が学術研究として一定の水準に達していると考えていたことがわかる。

鶴見和子は、報告書の巻末の対談において、市井論文についてコメントしている。「人間淘汰」が論文で考察されるのは「不足があるから」と指摘するように、市井は、当時の最新の学問である社会生物学から受け継いだ問題を、水俣への理解を深めないままに適用してしまった。水俣のことを知れば知るほど、人間淘汰について考察する必要がないことがわかる（この点で最首の指摘を引き受けている）。しかし、このような理解の不足は市井だけの問題ではなく、学術研究者が共通に抱えているものでもある。報告書でも、研究者ではない角田豊子（当時、玉名高校教諭）の「天草の女――嵐あらロぐちの一老女の話」や石牟礼道子「乳の潮」には、水俣の厳しい状況からの「出口」や「どんでんがえし」が示唆されてい

[12] ただし、市井のどこにカント流の論理が見いだされるのかはわからない。市井論文に、苦痛の削減を考察する功利主義、淘汰にかかわるダーウィニズムの発想が流入していることは確かである。市井が人間淘汰を批判するのは、カント的な人格の尊重の原理に由来しているということなのかもしれない。

るが、学者の論文からはそうした方向性が見えてこない。「この本を読んでいると出口なしになっちゃう」のに対して「石牟礼さんのところを読んで初めて救われました」と述べている。こうして鶴見は市井論文の不足を「学者が書いたものの不足」として引き受けて、「だからわたしは同罪です」としている。

> …水俣の問題というのは、やはり近代工業文明の最も極限的な害悪を身にひきうけた人たちの問題です。そうすると、わたしたちが使っている学問の分析の道具というものは、近代工業文明の枠の中の学問の用語です。その方法で分析していくと、出口なしという推論が最も客観的、科学的であるということになるわけです。そういう方法でやっている限りでは、どんでんがえしはありえないということなんです。ですからわれわれの力量不足を市井論文がつぶさにあらわしたとわたしは思います（色川 1983b: 501）。

鶴見の指摘は、「近代工業文明の枠の中の学問の用語」で何を念頭においているのかによって多様な意味を持つことになるが、市井の考察が功利主義や進化論などの用語――時代や地域の点で近代工業文明と結びつく――でなされていたことは確かであり、それらが水俣を考察するに相応しいものだったかを問うことはできるし、有意義な問いであろう。もっとも、このことは、学問の方法や根本概念にかかわるのであり、「出口」や「どんでんがえし」という政治運動の方向性（当事者の利害）に結びつけるべきかどうかは慎重になる必要がある。色川は、報告書において「出口なしというのには異論があります」と、この表現に明確に反論しており、近代化をあくまでも学問的に問い直すことの重要性を指摘している（色川 1983b: 502）。いずれにしても、市井-最首論争を、水俣にアプローチする学問の方法の問題として引き受けなおすことが示唆されている。

4　認識の問題：哲学の観点から

市井の水俣へのアプローチは、哲学研究者から振り返られることはほとんどない。丸山徳次、川本隆史、鬼頭秀一は数少ない例外と言えるだろう。

丸山徳次は、市井三郎の挫折を踏まえ、水俣の個別具体性に向き合うような「事件の哲学」の立場から、哲学による水俣へのアプローチを本格的に展開しており、日本における応用倫理学に画期的な貢献をしている（cf.丸山 1995, 1996, 2000, 2004, 2005, 2007, 2016, 2018）。1996 年の「水俣病と倫理学」では、市井-最首論争を振り返り、最首の指摘を踏まえながら、哲学研究の立場から市井論文の問題点がいっそう明確にされている。市井の論文は、色川や最首によって『歴史とはなにか』からの「転向」と理解されてきたが、その著作における「不条理な苦痛の削減」の論述にもすでに大きな問題が含まれていた。水俣病患者における苦痛は、患者を差別するような社会構造によって生じているが、市井の論点は個人から苦痛を取

り除くことのみを考察して、苦痛を生み出している構造を批判することがない。しかも、何がどのような意味において苦痛であるのかは、医者や研究者などの第三者が判断することになっており、当事者の観点から苦痛がどのようなものであるかが無視されている。市井は「苦痛を外部から第三者が規定できる」という発想を持っていたからこそ、患者の生を一様に悲惨で絶望的なものとみなすことができた。

> 苦痛に関してわれわれの言うべきことは、〈他者の苦痛の叫びに耳を傾けよ〉および〈他者に苦痛を与えるな〉ということと、特殊には、〈不条理な事実を理由にして他者を差別し、もって他者に与えるな〉ということまでであって、自-他の非対称性の関係を不明瞭にしたまま、〈不条理な苦痛を除去せよ〉と一般化しつつ主張することは危険である。ナチスが障害者の集団的虐殺を「慈悲による死（Gnadentot）」として実施したことを、もう一度思い起こしてみなければならないだろう（丸山 1996: 12）。

丸山の論述は、差別を作り出す社会構造に目を向ける必要性や水俣病の苦痛を考察する観点などの問題を提起している。前者は差別をめぐる政治哲学の課題として、後者は哲学の方法にかかわる課題として、いまなお重要な意味を持ち続けている。

川本隆史は丸山の論考を踏まえたうえで、「“不条理な苦痛”と「水俣の傷み」——市井三郎と最首悟の《衝突》・覚え書」において、市井-最首論争を取り上げ直している（川本 2008）。そこでは、市井の様々な時期の論考が詳細に追跡され、ある種の優生思想が最初期にも見いだされることが指摘される。また、最首の思想にも目が向けられて、市井への批判の背景には、水俣病患者の経験の「直接性」を共有する困難の自覚があることも明らかにされる。このほかにも、川本は「思想の科学」での活動など、市井の思考の背景を明らかにすることで、その論述を考察する手がかりを提供している。例えば、論理実証主義の影響下にある「思想の科学」の論者たちにおける規範倫理学の欠如のなかで、市井の価値哲学は異彩を放つことが指摘されたり(川本 2008: 278-279)、市井はしばしば自説を主張することで孤立を招く事態を引き起こすことが指摘されたりしている（ibid.: 278-279, 293-295）。その後も川本はこの論争を取り上げ、市井の考察の背景や論争が投げかけた波紋などを詳細に取り上げており、資料として重要なものになっている（川本 2019）。

川本の論文と同じシリーズ（『岩波講座・哲学』）の別の巻に掲載された鬼頭秀一の論考「環境破壊をめぐる言説の現場から」（鬼頭 2009）は、「どんでんがえし」をめぐる鶴見の指摘をさらに深化させるかたちで、学問の方法について考察している。その考察は「公害に第三者はいない」という宇井純のテーゼとこの論争を結びつけることから始まる。宇井純は公害問題にたずさわるなかで、第三者機関や科学者などの「中立的な形で振る舞おうとしている存在は、結果的に加害者として振る舞う」ことになると指摘していた。このことは、支援活動への参加という政治の問題ではなく、「認識の視点の問題」として考察されるべき

ものである[13]。つまり、行政機関や専門家が公害の原因究明や認定などをする場面においては、被害者の「被害」をトータルな形で受けとめようとする視点が、客観性や中立性を標榜する空間の中で「排除」されてしまう。こうした「認識のあり方の問題」ゆえに、「客観性を旨とする科学者であっても、また、客観性と科学的厳密性を重視する科学者だからこそ加害者の立場を演じてしまう」ことがある（鬼頭 2009: 157）。市井の論文の抱えている問題も、まさにこうした認識をめぐるものであった（丸山の指摘した視点の問題がより大きな枠組みで捉え直されている）。

鬼頭によれば、市井論文には厳しい批判が寄せられたが、社会生物学的な人間理解の是非を学問的に検討する意義はあるし、公害による不条理の痛みを普遍的な人間学的観点から捉えようとする立場が最初から指弾されるべきではない。むしろ重要なのは、市井-最首論争において「認識」が問題になったことであり、市井の認識の視点は、患者の生を見つめ、患者や支援者を理解するものではなかった。鬼頭は、市井の政治的立場を問題視しているのではなく、あくまでも学問的な視点の問題を指摘しており、この点から、最首による市井批判が、患者の側への利益・不利益という政治の水準に依拠することに疑問が呈されてもいる。「市井は、自らの科学哲学者としての思いに基づき、ある意味で、学問的な誠実さを貫くことで、政治的には「誤った」」のに対して、最首の批判は、患者への差別の助長を懸念する点で政治的には正しいが、市井の学術的な論旨を「政治的文脈に引きずり回して晒す」ことで学問的には「一種のルール違反」を犯している（ibid.: 160）。

> ……市井の学問的誠実性に対して、あえて一種のルール違反までも犯しても、市井の言説の社会的な意味を暴かざるをえなかった最首の思いは、この不知火海総合学術調査団の可能性と限界を端的に示しているのであった。私たちは、ここから始めなければならない。学問における「現場」とは何かという問いは、ここから始まるのである（ibid.: 160-161）。

ここでふたたび、鶴見の提起した「出口」「どんでん返し」が、そうした表現が示唆する政治的なものではなく、学問における認識の水準において論じられることになる。学術研究はいかなる視点から行われるべきなのか。市井論文は、学術論文として許容されるものであるが、命を奪われ、健康を破壊され、抑圧され、差別された当事者や関係者たちにかかわる視点の取り方において大きな問題を抱えていた[14]。

---

[13] 医師の原田正純は、味覚や嗅覚などの感覚障害を軽症とする病像を批判するが、その自著を 4 幕の演劇に見立て、それぞれの幕を「眼の記憶」「眼の記録」「眼の位階」「眼の横断」としており、私たちの見方を問い直している（原田 1989）。原田もまた中立的な立場に立つことが加害的になることに自覚的であった。

[14] 森下は、こうしたことを、社会学における研究における当事者と研究者との共同行為の問題として考察している（森下 2010）。

５　旅館で本を読む哲学者

最首の批判は、調査団のメンバーや哲学研究者たちによってさまざまに受けとめられたが、ここでは、最首からの批判が「見方」と「概念」の使い方にかかわっていたことを重視したい（本稿はその点を強調しながらまとめた）。市井はステレオタイプの病像を抱いており、それを改めることはできなかった。そうした偏見は、本来ならば、被害者の生に目を向け、その見方を共有することで覆されうるが、中立性を重視する哲学はそうした方法と折り合いが悪い。さらには、市井は「人間淘汰」という概念の創造を試みたが、習慣から独立に言葉の意味を定義する傾向は、哲学研究に広く見いだされ、ときにその美徳ともされる。市井の考察も、誰かがが使用する文脈から切り離して、概念の意味を自由に選択できるという発想のうえに成り立っていた。

これらの論点はいずれも哲学の研究手法と結びついており、鬼頭の指摘するように、哲学が水俣についてどのような立場から何をどのように「認識」するのかが問題になる。調査団長の色川によれば、哲学者としての市井は、水俣での現地調査の際にも旅館に引き篭もり、ほとんど人と接することなかった。このエピソードは、哲学の研究手法の特徴を浮かび上がらせ、その不自然さを気づかせる力をもっている[15]。

> 来てはみたものの、哲学者だからすることがないと言うんです。旅館で、いつもごろごろ寝ているか、本を読んでいるだけ（色川 2020: 325）。

> 「市井さん、それで何が分かるんですか」と私たちが聞いたら、「いや、僕はここで寝て、じいっとしていると分かるんだ」と仰るんです。旅館以外の外へはほとんど出たことがないですよ。哲学はどこかへ行ってするものではないんだと言われて、驚きましたね（ibid.: 331）。

市井は、アームチェアの哲学者として忠実に振る舞っていたのであり、当事者やその生きる状況から距離を取って、傍観者として考察し続けた[16]。

---

[15] このエピソードを引用するのは、市井の研究が旅館に引きこもっていたから失敗したとか、フィールドワークをすれば成功したということを示すためではない。水俣で調査をした市井の困惑や怖れや誇りをこのエピソードから読み取って、わがこととして引き受けることは、現代における応用的研究にとっても大きな意味があるように思われる。

[16] 水俣で当事者の「声」に耳を傾けなかった市井は、通常の研究活動では、自分と対立する研究者の「意見」に耳を傾け、冷静に吟味する姿勢から「ナルホド人」とも呼ばれている（多田 1991, cf.久野 1991, 渡辺 1991）。市井の姿勢は、学問の議論におけるテーゼに注目したが、人の生には関心を向けることがない。

鬼頭は、こうした「普遍的な視点」だけでは被害者の人間の総体を「掬い取れない」として、客観的・中立的視点に依拠する哲学の標準的方法を問い直している（鬼頭 2009: 163）。学術研究においても、客観的・中立的である「政策論的な視点」のみならず、当事者に寄り添うような「抵抗の原理の視点」が求められることがある[17]。政策論的な視点は、「公害」「環境」「地球環境」などの概念によって問題の大枠を把握するのに対して、抵抗の原理の視点は、地べたを這いずり回って生きる人間の視点であり、「その地で生きる人たちの「生」のあり方全体」を捉え、そこから課題を抽出しようとする（ibid.: 166）。後者はまさに当事者の声を「聴く」ことに支えられており、『水俣の啓示』における石牟礼や豊田の論考は、まさにこうした視点から当事者の声を記すものであったゆえに「出口」を示唆するように思われた。

とはいえ、研究者はあくまでも研究者として、「政治的に被害者や運動者の立場に立つのではなく、認識論的な意味において、その視点に立とう」とするのであり、当事者や支援者との距離を踏まえたうえで、個別の声を聴いて、そこから「普遍的な言語」を紡ぎだすことになる。当事者自身には明確ではない身体知を言語化したり、個別性を超えた水準で語り直したりする研究者の立場は、「よそ者」[18]という比喩によって特徴づけられる。

> 「よそ者」という視点は、「聴く」ということを続け、「現場」に対して共感を持ちつつかかわるという点で、認識論的な意味で、「現場」の被害者や運動者の視点に立とうとするが、その一方で、それに対して、「分析」や「言語化」ということを含めて、普遍的な視点を導入しようとするのである（ibid.: 168）。

よそ者の視点をもつ研究者は、当事者や支援者とともに活動するとは限らないが、現場に居合わせて、当事者の見るものをともに見て、そうした視点から語り出そうとする。

６　見方の倫理学、道徳的完成主義、現象学的倫理学

鬼頭は、市井-最首論争のみならず、日本における環境運動の動向を踏まえながら、哲学における「応用」をめぐるきわめて示唆的な提言をおこなった。「よそ者」として当事者の声を聴きながら、その声を反映させることは、哲学研究においてはどのような意味をもつの

---

17 政策論的な視点が不要ということではなく、そうした視点からの考察は水俣にとっても不可欠である。丸山の考察は、水俣病の原因究明における因果性の考察や予防原則の必要性の指摘は、政策論的な観点からなされている。近年でも、小松原が修復的正義という法学と当事者性の接点において、水俣への考察を展開している（小松原 2019）。

18 移住者などの土地の外から訪れた「よそ者」がしばしば実際の環境運動で重要な役割を果たしている。

だろうか。そうしたことは、フィールドワークをする環境社会学と密接に結びついた環境倫理学の方法であることを超えて、より一般的に哲学や倫理学の方法になりうるのだろうか[19]。水俣へのアプローチにおいては、フィールドワークではない仕方で、患者の生を見つめることは考えられる。市井が水俣を訪れたときにはすでに、石牟礼道子の『苦海浄土　わが水俣病』（1969 年）のような文章や土本典昭の『水俣　患者さんとその世界』（1971 年）などの一連の記録映画も発表されており、芸術作品を手掛かりにする可能性は開かれていた（吉川 2021a）。また、裁判記録などの文書を手掛かりに、当時者の声を浮かび上がらせることができるし、丸山はいわゆる「川本事件裁判」（補償交渉において川本輝夫がチッソの社員への暴力を振るったとして起訴されたが、二審において検察官の公訴権濫用が認められ、控訴棄却の判決がくだされた）の分析を通じて、水俣病という事件にかかわる当事者の生を描き出していた（丸山 2017）。

こうした試みの意味を明らかにして、哲学研究の方法として定着されるためには、20 世紀の英語圏を中心に展開した現代倫理学の方法を顧みて、その前提を問い直しながら、応用研究の方法論を考察する必要があるだろう。20 世紀の英語圏のメタ倫理学、規範倫理学、応用倫理学の展開を背景とする現代倫理学は、事実と価値が分離している（事実から規範を導出できない）と考えたうえで、規範を導く道徳原理を探究しながら、行為を自由に選択する場面について道徳的思考がなされることを前提にしている。さらにそこでは、行為の善悪や政策の決定についての価値判断は中立的な観察者の立場からなされることも想定されている。市井三郎も、こうした 20 世紀の現代倫理学の影響下にあって、現代社会の諸問題を考察していた。

ここでは、見方と概念の使い方という論点を念頭におきながら、現代倫理学の主流から外れたところで展開された倫理学的思考に目を向けたい（吉川 2021a）。I. マードックは、L. M. ヘアに代表される現代哲学や現代倫理学の主な傾向を批判しながら、ウィトゲンシュタインの強い影響や現象学研究の成果から独自の道徳哲学を構想していた[20]。マードックは、概念が使用される文脈を重んじ、それを使用する人々の見方を学ぶことのうちに倫理学的思考の核心を見いだしている[21]。ヘアを批判した論文では、当時のイギリスでは「倫理学は中立的な分析でなければならず、さもなければ何ものでもなくなってしまうという印象を

---

[19] 小西は共依存をめぐる問題についてフィールドワークを通じて当事者の視点に依拠しながら考察する（小西 2017）。戸田山は技術倫理において技術者との実際の共同作業においてそこから課題を受け取るような応用哲学の方法を示している（戸田山 2012）。ただし、本稿は、そうした倫理学の方法がどのような位置づけを持っているのかを明らかにすると同時に、文献研究のなかで当事者の生へアプローチする可能性を探ろうとしてもいる。

[20] マードックの「見方の倫理学」のメタ倫理学については佐藤を参照（佐藤 2017, 2021）。本稿は、そうしたメタ倫理学が応用倫理学の水準でどのような形を取るのかに関心を向けている。

[21] ヘアの道徳哲学を正面から批判した「道徳性における見方と選択」（1965 年）は完全に無視され、本人も小説家として活躍することもあり、狭義の哲学のアカデミズムを離れている(Broackes 2021)。

哲学者たちが抱きつづけてきた」ために、大陸哲学者（サルトルやボーヴォワール）のように「道徳生活を…想像力によって探究する」ことができないとして、中立性に依拠する道徳哲学を批判している（Murdoch1965: 58）。さらに主著の『善の至高性』においても、「中立的だと自称する哲学者たちも暗々裏に特定の立場に立脚している」と指摘し、その宗教的・政治的な背景を明らかにした上で、道徳的思考の根幹が見方の変化にあることから「道徳哲学は中立的であることを目指すべきだという主張は成り立たない」とも述べている（マードック 1992: 82）。マードックが構想する「見方の倫理学」は、私たちはそもそも中立的立場に立つことなどできず、特定の見方のなかで思考していることを踏まえ、他の見方に開かれていることの道徳的意義を明らかにする。しかも、他なる見方を学ぶことは他の言語を学ぶことと結びつけられている。

> 言葉は空間時間的な文脈と概念的な文脈との双方を持っている。われわれはそれらの文脈に参加することを通じて学ぶのであり、ボキャブラリーは対象に対する緻密な注視を通して広がって行く。また、私たちが他者たちを理解できるのは、ある程度まで彼らと文脈を共有しうる場合のみである（ibid.: 49）。

文学を通じて他の人々の見方に触れることも、こうした思考にとっては大きな意味をもっている。

マードックの影響を受けた S.カヴェルは、私たちのものの見方や生き方に焦点を合わせて、異なる見方のせめぎあいを考察する「道徳的完成主義」を展開している。「完成主義」は「道徳的生活についての競合する理論ではなく、なにか道徳的生活のもつ次元や伝統のようなもの」であり、規範を導出する理論の形成を重視する現代倫理学を退けた上で、「人と人との関係」や「自己が（そしてその社会が）変様する可能性や必然性」に光をあてる（カヴェル 2019: 55）。誰がどのような見方のなかで生きるのか、他の見方の人たちとどのようにかかわるのかが思考の焦点になる。しかもカヴェルは、エマソンの「思考は偏った（部分的な）行為である」という言葉を独自に解釈しながら、倫理学における「偏った（partial）思考」の避けがたさを強調している（ibid.: 124, カヴェル 2005: 152−153）。それぞれが自己の生の条件からしか世界や他者に接することができないのであり、思考はそうした生の条件から自らを明らかにすることになる。そのうえで、思考の条件となる言語について以下のような指摘がなされている。

> われわれは自分のことばを選択することはできても、その意味を選択することはできない…。ことばの意味は、ことばが所属する言語の内にある。そして、われわれが言語を所有するということは、言語のうちである生活形式をとることであり、われわれが言語に対して求めるものである（カヴェル 2005: 78）。

ここには概念の意味を自由に定義する市井とは対照的な言語観が表明されており、特定の生活形式と結びついた言語が哲学的思考の条件とされる。カヴェルは思考の偏りを「われわれは言葉のうち生まれ落ちる」ことと関連づけるが（ibid.: 79）、こうした発想はハイデガーの実存や言語についての洞察を手掛かりとしている。ハイデガーは、実存の「能力」が状況に投げ入れられていることと不可分であることを指摘し、そのような状況づけられた可能性からの思考を重んじている。ハイデガーの「Möglichkeit」「vermögen」「mögen」などの能力や傾向にかかわる術語は、偏りを生きざるを得ない実存を表現するために用いられている（カヴェル 2019: 123）。

もともとマードックが中立性を批判するときには、大陸哲学（＝実存主義・現象学）が手掛かりにされていた。最初の哲学的著作『サルトル』では、サルトルの小説が「自由」な読者を前提にしており、自由という価値に訴えるものであることから、「著者は決して中立的な観察者ではありえない」と述べていた（マードック 1968: 99）。マードック、カヴェル、現象学（ハイデガー、サルトルなど）の流れの中では、実存を条件づける特定の立場からなされる思考の可能性が模索されていた。そこでは、ときに抑圧されて現れにくい人の生き方や見方を記述したり、そうした声に出会うことで変容する私たちの概念や見方を分析したりすることに意義がある（cf.吉川 2022）。

こうした倫理学は、そもそも善や人間とはどのようなものであるかを考察するメタ倫理学や人間論のような抽象的なスタイルで展開されたわけではなく、社会の具体的な問題にも向き合いながら、大きなインパクトを残している。その一例としてボーヴォワールの『第二の性』（1949 年）を引き合いに出すことができる。女性の実存を描き出すことで、20 世紀の社会に決定的な影響を与えることになったこの著作は、「女の状況を明らかにするのに最も適した位置にいる」のは「女たち」であり、「女たちに与えられている世界をありのままに女の視点から描く」というように、認識論的に偏った立脚点から記されている（ボーヴォワール 2001: 34, 39）[22]。

> どんな問題でも、人間の問題を中立の立場で論じることは不可能であろう。というのも、問題をどう立てるか、どういう観点をとるかということ自体、論者の関心に序列があるということを物語っているからだ（ibid.: 36）。

こうした立場から女性の経験を解明することで、従来の「世界を考えるときに用いる諸々のカテゴリー」は、男の視点から形成されていることも明らかになり、中立性を重んじるはずのスタンスが中立的ではないことが暴きだされている（ibid.: 509）。このような現象学的倫理学は、当事者の生を見つめようとする観点からなされるものであり、当事者の見方を言

[22] 小手川は、「認識的不正義」の議論が中立性の理想を掲げることへのクレーリーの批判を手掛かりに、現代のフェミニスト哲学の可能性を記している（小手川 2021）。

語化することで、既存の学問の概念や問題設定を修正したり、社会を変革したりする可能性につながっている。

むすび

本稿は市井-最首論争やその後の議論を手掛かりに、哲学における「応用」の方法を考察した。現代倫理学は、事実と価値の分離を前提にした上で、中立的立場から道徳原理に依拠して価値判断を下すことを前提にする流れがあり、ここから応用倫理学が確立された。しかし、丸山の事件の哲学、鬼頭の環境倫理学、マードックの見方の倫理学、カヴェルの道徳的完成主義、ボーヴォワールの現象学的倫理学など、当時者の声に耳を傾け、当事者から見方を学ぶことを重視する流れがあることを明らかにした。しかも、そこには、フィールドワークによる聞き取りのほかに、当事者にかかわる資料の読解を通じてその見方を学ぶ方法も考えられる。そうした裁判記録・文学・英語などの研究の可能性の探究は、まだ始まったばかりである。

付記

本稿は、「遠く離れて思考することの倫理」（日本倫理学会第 72 回大会・公募ワークショップ「〈応用〉することの倫理：緊縛シンポ・ブルーフィルム・ジェンダー」2021 年 10 月 1 日での提題）を新たに原稿にしたものである。『フィルカル』6(3)号に掲載された拙論「水俣の哲学者」（吉川 2021b）は、本稿のダイジェスト版であり、内容的に重なる部分がある。

もともと、日本倫理学会ワークショップにおいて、ブルーフィルム（非合法のポルノ映画）の研究者としての立場から、緊縛シンポジウムに関連した哲学の研究方法に関する提題をすることになっていた。しかし、緊縛シンポジウムが人にかかわる哲学研究をめぐる問題に直面していることから、水俣にかかわる哲学研究の歴史（市井三郎の取り組み）を振り返ることがより望ましいと思うようになった。緊縛シンポジウムにおける出口康夫の哲学研究（出口 2020）とそれに対して河原梓水と小西真理子によってなされた批判（河原 2021, 河原・小西 2021）が、ある部分において、市井への最首による批判を再演しているように見えた。

ワークショップでは、ブルーフィルム研究者の立場からも若干のコメントをしたが、この論考を作成するに際しては、水俣へのアプローチに論点を絞っている。とはいえ、ブルーフィルムなどのポルノ映画をめぐる研究でも、同じような問題が生じる可能性がある。哲学研究者は、水俣を訪れることがないまま水俣について語りうるように、ポルノを鑑賞することのないまま、関係者と知り合うことのないまま、既存の議論を整理しながらポルノを考察することができる。

緊縛シンポジウムの学術的価値については、筆者は河原や小西を通じて問題の所在や深刻さを認識し、同意したにすぎず、評価できる立場にはない。本稿の文脈からシンポジウムの学術研究の在り方についてコメントするならば、英語字幕付きでの録画動画の配信という公開範囲が望ましくなかったように思われる。研究において、不十分な見解が表明されていたり、事実誤認がなされていたりすることはある意味では許容されるべきである（研究者としてそう願ってもいる）。小規模の研究会や紙面上において大きな問題点が指摘され、修

正されるのは望ましいことでもある。市井三郎も、最終的な論文を寄稿する以前に、原子力発電所にかかわる論点に言及した発表を調査団の研究会で行い、厳しく批判され、撤回している（cf.色川 1983a: 30-31、森下 2010）。修正の末に現在の論文が掲載されるようになり、ふたたび批判がなされて、市井-最首の対立を残したままでの報告書の出版となった。学術研究におけるこうした議論は、限定された範囲でなされるかぎり、哲学の方法をめぐる問題を顧みることができる点を含めて、大きな意味があるだろう。

参考文献

石牟礼道子(2004): 「島へ――不知火海総合学術調査団への便り」『妣たちの国』講談社文芸文庫、168-189 頁（初出『潮』1977 年 7 月号）

市井三郎(1968): 市井三郎編・訳『科学の哲学』（現代人の思想 20）河出書房

市井三郎(1971a):『歴史の進歩とは何か』岩波新書

市井三郎(1971b):「感覚主義の極北 大森荘蔵「言語・知覚・世界」」『思想』569 号、143-152 頁

市井三郎(1974):「「近代化」と価値の問題」市井三郎・鶴見和子編『思想の冒険』、筑摩書房、27-55 頁

市井三郎(1983):「哲学的省察・公害と文明の逆説――水俣の経験に照らして」、色川大吉編『水俣の啓示（上）』、筑摩書房、1983 年、391-412 頁

色川大吉(1983a): 色川大吉編『水俣の啓示（上）』、筑摩書房

色川大吉(1983b): 色川大吉編『水俣の啓示（下）』、筑摩書房

色川大吉(1995): 色川大吉編『新編　水俣の啓示』、筑摩書房

色川大吉(2020):「不知火海総合学術調査団のころ――色川大吉聞き書」（桜井厚インタビュー）『不知火海民衆史〈下〉聞き書き篇』、揺籃社、309-348 頁

カヴェル, S (2005): 齋藤直子訳『センス・オブ・ウォールデン』法政大学出版局（Cavell, Stanley(1992), The Senses of Walden, University of Chicago Press）

カヴェル, S (2019): 中川雄一訳『道徳的感性主義　エマソン・クリプキ・ロールズ』春秋社（Cavell, Stanley(1990), *Conditions Handsome and Unhandsome: The Constitution of Emersonian Perfectionism*, University of Chicago Press）

河原梓水(2021):「京大・緊縛シンポの研究不正と学術的問題を告発します⑤出口氏報告&座談トーク」, Note 記事（https://note.com/azumi_xx/n/n5aedbe8e2aa0?magazine_key=mb2dd7ff4eb0a）2021 年 9 月 30 日確認

河原梓水・小西真理子(2021):「【対談】京大・緊縛シンポジウムを考える」 『フィルカル』6(2)、206-226 頁

川本隆史(2008):「”不条理な苦痛”と「水俣の傷み」――市井三郎と最首悟の《衝突》・覚え書」、岩波講座・哲学 1 巻『いま〈哲学する〉ことへ』、277–299 頁。

川本隆史(2019):「進歩史観の 隘(ゆきづまり) 路 ・不条理な苦痛の軽減・ 人(ピープル) 民 の抵抗力の強さ――市井三郎との３ラウンド」、哲学者・市井三郎没後 30 周年記念事業【トークイベント】いま読み直す『歴史の進歩とはなにか』（2019 年 11 月 10 日／神保町ブックセンター）、市井三郎サイト（http://www.ichiisaburo.com/30anniv_talkevent.htm）よりイベント動画（2021 年 11 月 30 日閲覧）

鬼頭秀一(2009):「環境破壊をめぐる言説の現場から」、『岩波講座哲学第 8 巻 生命/環境の哲学』岩波書店、151-170 頁

久野収(1991):「追悼の言葉」鶴見俊輔・花田圭介共編『市民の論理学者・市井三郎』思想の科学社、13-18 頁。

小手川正二郎(2021):「フェミニズムの哲学」が可能だとしたら、それはどのようにしてか？」『哲学の探求』48 号、2-22 頁

小西真理子(2017):『共依存の倫理――必要とされることを渇望する人々』、晃洋書房

小松原織香(2018):「「公害問題」から「環境問題」へ――水俣地域における「不知火海総合学術調査団」の活動を手掛かりに」、『現代生命哲学研究』7 号、早稲田大学人間総合研究センター、74-106 頁

小松原織香(2019):「〈被害者の情念〉から〈被害者の表現〉へ―水俣病「一株運動」（1970 年）における被害者・加害者対話を検討する」『現代生命哲学研究』8、57-129 頁

最首悟(1983):「市井論文への反論」、色川大吉編『水俣の啓示』（上）、筑摩書房、415-426 頁

佐藤岳詩(2017):『メタ倫理学入門　道徳のそもそもを考える』勁草書房

佐藤岳詩(2021):『倫理の問題」とは何か メタ倫理学から考える』光文社新書

出口康夫(2020):「緊縛の哲学　アジア的自己の観点から」、緊縛ニューウェーブ×アジア人文学、2020 年 10 月 24 日、発表

多田道太郎(1991):「市井さんの姿勢」鶴見俊輔・花田圭介共編『市民の論理学者・市井三郎』思想の科学社、126-129 頁

戸田山和久(2012):「哲学を応用するとはいかなることか」、『これが応用哲学だ！』戸田山和久・美濃正・出口康夫編、大隅書店、28-36 頁

永野いつ香(2020):「胎児性水俣病世代の未認定患者への補償と福祉」『平和研究』54（沖縄問題の本質）、日本平和学会、 153-174 頁

羽賀しげ子(1983):「調査団日誌」色川大吉編『水俣の啓示』（上）、筑摩書房、1983 年、431-468 頁

原田正純(1989):『水俣・もう一つのカルテ　水俣=語りつぎ』新曜社

Broackes. Justin (2012): “Introduction” in Iris Murdoch, Philosopher: Collection of Essays, edited by J. Broackes, Oxford University Press.

ボーヴォワール, S.de(2001):『第二の性』を原文で読み直す会訳 『第二の性』1、新潮社（*Le Deuxième Sexe*(1949), Gallimard）

Murdoch, Iris (1965): “Vision and Choice in Morality” in *Aristotelian Society Supplementary* 30 (1), pp.32-58.

マードック, I. (1968): 田中清太郎・中岡洋訳『サルトル　ロマン的合理主義者』田中清太郎・中岡洋訳、国文社（Murdoch, Iris(1999), *Sartre: Romantic Rationalist*, Vintage Books）

マードック, I. (1992): 菅豊彦・小林信行訳『善の至高性 プラトニズムの視点から』九州大学出版会　（Murdoch, Iris (1970), *The Sovereignty of Good*, Routledge Classics）

丸山徳次(1995):「哲学的・倫理学的問題群としての<水俣病> ——「エコロジーの倫理と哲学」のためのノート」『龍谷大学論集』 447 号、78-110 頁

丸山徳次(1996):「水俣病と倫理学」『倫理学研究』26 号、関西倫理学会、1-13 頁

丸山徳次(2000):「われわれの応用倫理学の源泉としての〈水俣病事件〉」川本隆史・高橋久一郎編『応用倫理学の転換　二正面作戦のためのガイドライン』ナカニシヤ出版 78-104 頁

丸山徳次(2004):「講義の 7 日間　水俣病に向けて」丸山徳次編『岩波　応用倫理学講義 2 環境』岩波書店、1−70 頁

丸山徳次(2005):「文明と人間の原存在の意味への問い——水俣病の教訓」加藤尚武編『新編　環境と倫理』有斐閣

丸山徳次(2007): 「鏡としての水俣病——水俣病の／と現在」『水俣 50 年　ひろがる「水俣」の思い』作品社、70-94 頁

丸山徳次(2016):「暴力とコミュニケーション——或る傷害事件を見る眼」『現象学と科学批判』、晃洋書房、333-359 頁

丸山徳次(2018):「事件の哲学と応答倫理学 ——「事例研究」ではなく」『倫理学研究』48 号、関西倫理学会、28-39 頁

森下直紀(2010):「水俣病史における「不知火海総合学術調査団」の位置——人文・社会科学研究の「共同行為」について」、『生存学研究センター報告』14 巻、立命館大学生存学研究センター、319-348 頁

吉川孝(2020):「道徳経験としての声を聴くこと——土本典昭における水俣病患者の声」、『文明と哲学』12、162-183 頁

吉川孝(2021a):「倫理学における芸術作品の使用と想像力の問題——フッサール、マードック、その後継者たち」、『倫理学年報』70 集、18-28 頁

吉川孝(2021b):「水俣の哲学者　市井・最首論争における概念と見方の問題」『フィルカル』6(3)　36-45 頁

吉川孝(2022):「哲学における自伝的なもの——カヴェルとボーヴォワールからフェミニスト現象学の方法を考える」『フェミニスト現象学』ナカニシヤ出版、頁未定

渡辺一衛(1991):「市井先生の思い出」鶴見俊輔・花田圭介共編『市民の論理学者・市井三郎』思想の科学社、115-120 頁